

氏名	SALEHA Amaliatun
学位の種類	博士（地域研究）
学位記番号	国博甲第2号
学位授与の日付	平成27年3月21日
論文題目	Reading Social Changes in Japanese Literature around 1990-2010: Existential Anxiety in Self-Identity
審査委員	主査（教授）上村直樹 （教授）BUDIANTA, Melani（インドネシア大学） （教授）細谷博 （教授）森山幹弘

1. 論文の内容の要旨

本論文は 1990 年から 2010 年までの日本文学作品に社会変容がどのように描写されているか、特に自己アイデンティティの存在論的不安 (Existential Anxiety) を軸にして 2 冊の小説の解釈を試み、日本社会の価値観の揺らぎが文学作品にどのように映し出されているかを論じたものである。

本論文の構成は 5 つの章から成る。1 章は導入の章であり問題の背景と方法論、2 章は 1990 年代以降の日本社会の変容、3 章では 1990 年代以降の日本文学の動向を大量のデータを基に調査し、4 章では 3 章の調査から選び出した 2 冊の小説『蹴りたい背中』(2003) と『対岸の彼女』(2004) の解釈と分析を行い、終章の 5 章は結論という構成となっている。

1 章では、方法論としてアンソニー・ギデンズの社会学の理論を用い、人間関係の希薄は現代社会的関係の特徴であり、人間関係においては存在論的安心と信頼が必要であることを取り上げる。信頼することは決断の背景となる一般的な心的態度であり、それは自己アイデンティティを他者の評価と決定的に結びつける根本になっていることを指摘する。一方、人間はさまざまなリスクに囲まれて生きており、精神的な脅威を経験し、「存在論的不安」に悩まされている。つまり現代社会において自己アイデンティティは存在論的な不安に脅かされているが、そのアイデンティティは自己の選択によって形成されていくことを、本論文において文学作品の分析枠組みとすることを述べている。次に、本論文が日本の社会が変容をきたす 1990 年代以降の文学作品を対象とし、それらの作品の中で上記の自己アイデンティティの存在論的な不安に焦点を当てて論じるものであることを述べる。

2 章においては、1990 年代から 2010 年までを研究の対象としたことについて述べている。その時期には神戸大地震やオウム真理教のサリン事件が起こったとともに、これまで自明であった「日本—日本人—日本語—日本文化」という「四位一体」に揺れが生じた時期でもあった。それによって 1990 年代の日本社会では価値観の変容が起こり、物質主義的な風潮が顕在化してきた。日本人は豊かな暮らしを手に入れた一方で、存在の無意味で人間関係の冷たい生活の中で暮らすようになり、何事にも信念を持たず、人間関係が稀薄になってきた。そのような時代においては、人間関係の「極寒」、自由な雰囲気、インターネットの急速な発達、選択の多様化などが社会の不安定化に影響を与えたと指摘する。弛緩した暮らしに浸るフリーター、援助交際、おたく、ひきこもり、集団自殺などの現象はその時代の社会現象と指摘する。これらの現象から、日本の伝統的・道徳的な価値観が変化してきたことが窺われ、ひいては自己アイデンティティにも影響を与えたのではないかと推論される。

3 章は、1990 年代から 2010 年までの文学作品についての量的な調査の章となっている。日本の文学界における雑誌の果たす役割の大きさ、また特に 20 の文学賞の果たす役割の重要性に着目し、手掛かりとして、この 20 年間の様々な文学賞の受賞作を調査している。さらに、出版業界の調査を行い、どのような作品がベストセラーとなったかを調べている。それらのデータを基本資料として、どのような作品がこの時代を代表する作品と言えるのかを論じている。それらの資料を分析すると、2 章で見られた日本社会の揺らぎは文学作品にも投影されていると考え、純文学とエンターテインメントあるいは大衆文学という文学の境目が分かりにくくなったこと、その結果としてより開かれたものに文学自体も変容してきたと論じている。

4 章は、前章の調査から明らかになってきた代表的な文学作品からさらに絞り込み、13 の作品をこの論文の対象とする時代の重要なものとして提示する。さらに、それらの中から 2 章で論じた自己アイデンティティにおける存在論的不安の問題をより鮮明に映し出している作品として綿矢りさの『蹴りたい背中』(2003 年出版) と角田光代の『対岸の彼

女』(2004 年出版)を選び出し、それぞれを丁寧に読み解いている。この2つの小説では、ギデنزが指摘する現代社会の問題である社会における放置(civil indifference)や環境によって受け入れられない恐怖を持つ人々の実存的不安(existential anxiety)が描写されており、日本社会におけるグループの依存性、孤独感、一人ぼっちの恐怖などの問題と2章で取り上げた様々な社会現象がその理論的な枠組みの中で論じられている。さらに、『蹴りたい背中』では、若い世代に見られる過度の個人主義の問題、『対岸の彼女』では社会にはびこる偏見の問題、学校のいじめの問題がテーマとして取り上げられていると論じている。

終章は4章までの議論を総括するとともに、取り上げた20年間の日本とその間に書かれた文学作品が相互に影響を与え合っていることを述べている。またギデنزの理論は西洋社会を分析するときの理論であり、社会的な結びつきの強い日本の社会にそのまま適用することの限界もあることを論じている。また、4章で取り上げた2つの作品において登場人物の多くが女性であり、日本の社会における女性の立場、置かれた環境、様々な制約や抑圧の観点からさらに掘り下げ、かつより広げた議論を行うことが今後の課題であると述べている。

2. 論文審査の結果の要旨

本論文は社会と文学の関係をアンソニー・ギデنزの社会学的な理論を使って論じたものである。1990年代からの日本社会が変容してきたことを論じ、その社会の変容、特に伝統的な価値観が揺らぎ、社会の中での個人の有り様にも変化が起きたことにより自己アイデンティティに揺らぎが生じ、それをギデنزのいう存在論的不安としてとらえた。その見方を文学作品の分析視角とし、日本社会の現代的な問題が2つの小説の中に描かれていることを丁寧に読み解いている。ギデنزの社会学の理論を文学作品の分析に応用した点は独創的で高く評価できる。しかしながら、仮にそこからさらに日本の社会の持つ強い社会的な結びつきや共同体の意識といった特徴から、ギデنزの理論が説明できない点まで批判的に論じることができれば、より大きな学術的な貢献となったであろう。

本論文が、手堅く丁寧に、20年間の日本における文学作品の出版状況を調査し、文学賞やベストセラー作品から13点の小説をあぶり出し、さらに現代の日本社会の様々な社会問題を映し出している2点の作品を選び出した一連の作業は高く評価できるものである。その結果として提示された資料は、今後の文学研究の貴重な資料を形成しており、特に論文が英語で書かれたものであるが故に、日本の国外の研究者にとって有益な研究材料となると考えられる。文学作品を材料とするとともに、文学作品自体を日本の社会問題と社会の変容の証左として提示していることは、社会研究の手法として野心的、先進的であると評価できる。

論文執筆者にとって外国語である日本語で書かれた多くの文学作品を丁寧に読み解いていること、さらにそれを外国語である英語で論文としてまとめたこともまた評価できるが、その論文のスタイルと表現方法は、研究者として今後さらに鍛錬されて行かなければならない。一方、第一言語であるインドネシア語で書かれた草稿を改稿しインドネシア語の著書として出版することができれば、インドネシアの日本研究に大きな貢献を果たすことが期待される。

平成 27 年 2 月 19 日

審査委員（主査）（教授）上 村 直 樹
（教授）BUDIANTA, Melani（インドネシア大学）
（教授）細 谷 博
（教授）森 山 幹 弘